

第47回文化講座

発掘調査速報展 2011 その2

【日時】8月20日（土）13：30～16：15

【会場】沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

沖縄県立埋蔵文化財センター
第47回文化講座「発掘調査速報 2011 その2」

平成23年8月20日（土）13：30～16：

あいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センター所長 大城 慧

「円覚寺跡発掘調査」	金城貴子……1
「首里城跡(淑順門西地区・奉神門地区)発掘調査」	瀬戸哲也……6
「中城御殿跡発掘調査」	仲座久宜……12
「喜田盛遺跡発掘調査」	瀬戸哲也……18

質疑応答

円覚寺跡

沖縄県立埋蔵文化財センター
調査班 専門員 金城 貴子

事業名：円覚寺跡発掘調査

所在地：那覇市首里当蔵 2-1

時代：グスク時代～近代

調査期間：2010年（H22）7月1日～2010年（H22）9月8日

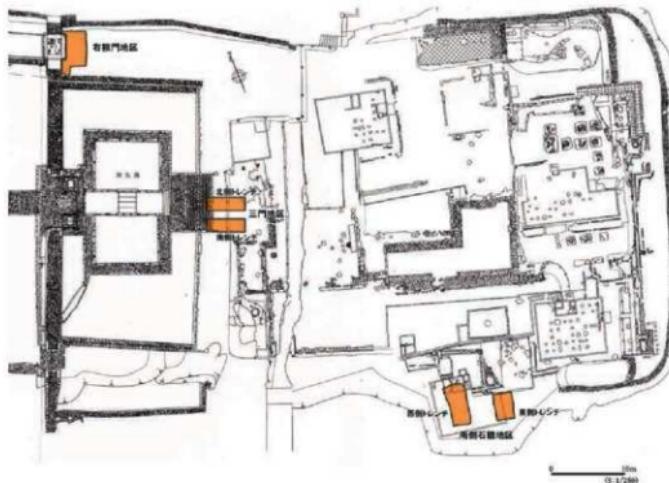
調査内容：円覚寺跡石牆復元整備に伴う遺構確認調査

1、はじめに

円覚寺とは1492年に着工、1494年に完成した臨濟宗の總本山で、尚真王が父の尚円王の靈を祀るために建立されたと伝えられる寺院である。1933年には建造物として国宝に指定されたが、1945年の沖縄戦によって建物等は焼失した。更に戦後には琉球大学が建設されるなどしたが、1968年に琉球政府文化財保護委員会を中心となって、総門、左脇門の復元と、放生池の修復が行われました。1972年に国指定史跡となり、首里城を軸にした復元整備事業に付随するかたちで、国庫補助事業による復元整備が着々と進められている。

2、これまでの経過

円覚寺跡の復元整備事業に伴って平成9年度から平成13年度までの5カ年の国庫補助事業で遺構確認調査を実施した。その成果に基づき、翌年から円覚寺跡の外周を取り囲む石牆の復元整備を実施している。現在も継続中である。



第1図 平成22年度発掘調査実施箇所

3. 平成 22 年度の調査成果

平成 22 年度の円覚寺跡発掘調査は、「右掖門地区」、「三門地区」、「南側石牆（せきしよ）地区」において調査を行った。地区別に成果をまとめたい。

右掖門地区（図版 1）

右掖門の根石の一部と門から内部へと続く石敷きの道が検出された。さらに、石敷きの道の下にもぐるよう 5~20cm 大の石が集中している状況が確認できた。石の集中部分については排水を考えたものと考えられるが、北側でしか見つかっていないため、詳細については今後の検討課題である。遺物は、中国産青磁、褐釉陶器などが少数ながら見つかった他、瓦や磚が出土した。

三門地区（図版 2、3、4）

琉球政府によって復元された階段の下から、石積みが検出された。この石積みは、昨年度の調査で検出された土留めの機能が想定される石積みとつながる可能性がある。また、石積みの裏側には石灰岩の石が比較的広い範囲で見つかった。これは三門周辺の水はけを良くする機能があったものと考えられる。調査の目的としていた往時の階段遺構は見つからなかったが、石牆側に面を持つ石や、別固体を上に置くことを意識したと考えられる抉りの入った石などが検出された。これらは階段の基礎と考えられる。

南側石牆地区（図版 5、6）

石牆の一部と考えられる石積みが検出された。これにより、未整備の石牆ラインを推定することができた。その他、円覚寺跡の内部施設と考えられる方形状の遺構も見つかった。

4. まとめ

今回は、3 地区にて調査を行った。

右掖門地区では門の根石の一部を確認するとともに、右掖門から内部へと続く石敷きの道が良好な状態で残っていることを確認できた。また、右掖門周辺の排水を意識したと考えられる遺構も見つかった。

三門地区では、琉球政府によって復元された階段の下より、石積みや往時の階段遺構の基礎と考えられる遺構が検出された。ただし、明確な階段遺構を見つけることはできなかつた。

南側石牆地区では、これまで石牆が見つかっていなかった箇所において、石牆の一部が残存している状況を確認できた。これにより、未整備の石牆ラインを推定することができた。その他、円覚寺跡の内部施設と考えられる遺構も見つかった。

今回の調査成果と課題をしっかりと整理し、今後の調査に活かしていきたい。



図版1 右掖門地区的遺構



図版2 三門地区的遺構



図版3 検出された石積み（三門地区・南側トレンチ）



図版4 階段の基礎と思われる切石（三門地区・南側トレンチ）



図版5 検出された石牆（南側石牆地区）



図版6 検出された石牆と方形状の遺構（南側石牆地区・西側トレンチ）

首里城跡「淑順門西地区・奉神門地区」の発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター
調査班 主任 濑戸哲也

場所：那覇市首里当蔵3丁目1番（国営沖縄記念公園首里城地区）

目的：首里城復元整備に伴う遺構確認調査

期間：平成22（2010）年9月1日～平成23（2011）年2月25日

面積：185 m²（淑順門西地区…180 m² 奉神門地区…5 m²）

時代：13世紀後半～20世紀（グスク時代～近代）

1.はじめに

首里城跡発掘調査は、18世紀ごろから戦前まであった姿を復元するために必要な情報を得るために、昭和59年度から継続して沖縄県教育委員会（現在は、当センター）が行っています。

平成22年度は、淑順門西地区と奉神門地区において実施しており、各地区的調査成果を説明していきます。

2. 淑順門西地区的調査成果

今回の調査では、淑順門から正殿に延びる城壁を確認することを目的としました。その結果、上半部は沖縄戦によって破壊されておりましたが、戦前のころまであったと思われる城壁が確認できました。一方、城壁の下層には13世紀後半まで遡る土層も確認しており、首里城の成り立ちを考える上で重要な成果が得られました。

（1）城壁

この城壁は、現在復元されている淑順門につながるもので、正殿に向かって直角に曲がるコーナーがあります。このコーナーは、本土の城郭などと異なり直線的に作るのではなく、曲線で緩やかに積んでいくことが挙げられ、これは琉球の大きな特徴です。また、石積の積み方が突然変わっているところもあり、様々な改変を経て戦前まで存在してきたものと思われます。

この城壁は、15世紀半ばの土層を掘り込んで作られているので、それより新しいことは確実です。また、この城壁に埋もれるような形で15世紀前半以前の石積みも部分的に確認されています。

（2）城壁下層

城壁下層からは、13世紀後半から15世紀半ばにかけて約1.5mの土が堆積しており、古い順番に説明します。

①13世紀後半～14世紀の堆積層

岩盤の上に堆積する地山（マージ）の上に堆積している層で、自然に堆積したものと考えられます。現時点では、首里城跡で最も古い堆積層と考えられますが、石積などの遺構は確認できていません。

②14世紀後半の礫層

人頭大の礫が多く入った礫層が厚さ 50 cmも堆積しており、城壁や平場などを作る為の造成層と考えられます。遺物はほとんど出土しませんが、層順から 14世紀後半ごろと考えています。

③15世紀前半の炭層

②の造成層の上に広がる炭層で、大和系瓦が多く出土しています。部分的に石積が確認されているので、古く見ると 14世紀後半、新しくても 15世紀前半には戦前とは異なった城壁があったものと考えられます。

この瓦が明確に焼けているとは言えませんが、瓦葺建物がこの付近、例えば今の正殿の方にあった可能性が高いと考えられます。

④15世紀中葉の骨・貝混じり層

③の土層の上に数cmと薄いコーラル敷きの層を挟んで、多くの炭とともに獸・魚骨・貝殻や陶磁器片、刀の鍔などが出土する土層です。当時の人々が捨てたゴミや火災にあったものを廃棄したと考えられます。骨・貝が多く出土する層で、当時のゴミが投げ捨てられた可能性が考えられます。

このように、今回の調査では 13世紀後半の土層も確認でき、戦前に至るまで幾度もの変遷が経てきたことが分かります。

3. 奉神門地区の調査成果

奉神門地区は、昭和 63 年から平成元年にかけて既に発掘調査が行われ、復元整備がなされています。今回、過去の調査で確認された石甕が敷かれた地面に大甕が埋められた遺構を復元するために、再調査を行いました。過去の調査では、甕が確認された時点で調査を終了していたので、その甕の大きさや形やどのように埋められたかなどの詳細は分かりませんでした。

調査により、この甕は石甕が敷かれた 18世紀頃に共に埋められたことが分かりました。また、この甕は高さ 90cm 近くある非常に大きな甕であったことも分かりました。この甕の底部内面には貫通しない小さな凹みが 10ヶ所見られますが、非常に大きな甕であるためちゃんと焼き上げるための工夫でしょうか。

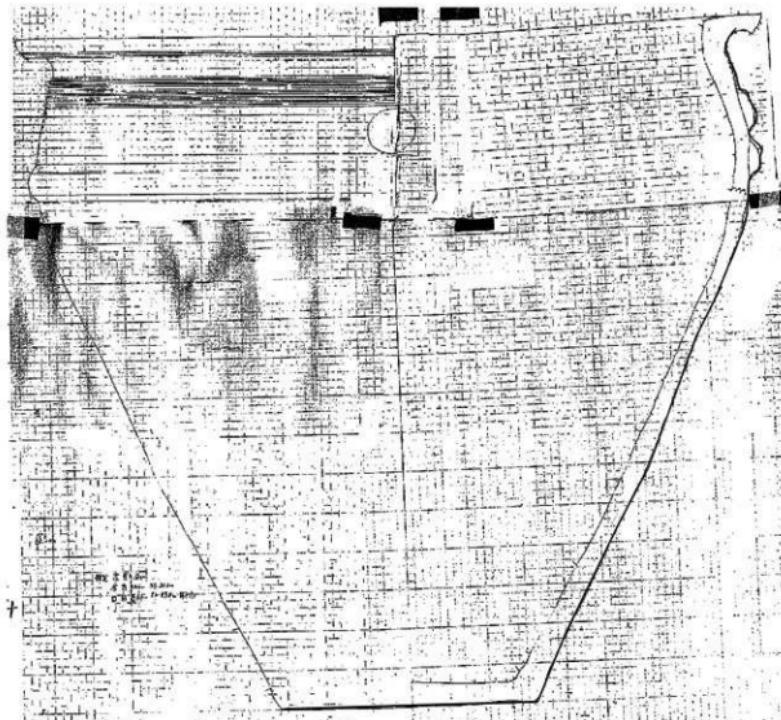
この埋甕の用途ですが、骨や貝などは出土しなかったため、ゴミ捨て場ではなく、防火用の水ガメであった可能性も考えられます。

現在では、この甕が復元されており、その状況を見ることが出来ます。

4. おわりに

今回の調査は、淑順門西地区と奉神門地区で行い、各々成果を得ることが出来ました。特に、この首里城跡で 13世紀後半から人々の何らかの活動があったことが確実となったことが重要だと思われます。このことは、今帰仁城跡や浦添城跡や佐敷上グスクなどの各地の拠点的なグスクと同じ時期に造られ始めていた可能性が考えられます。

しかしながら、まだこの時期のグスクとしての範囲や遺構などは明確になっていないので、今後の調査により首里城の始まりが明確に出来るように努めていきたいと思います。



中城御殿跡発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター
調査班 主任専門員 仲座久宜

事業名：首里城公園（中城御殿エリア）発掘調査

所在地：那覇市首里大中町1丁目1～3番

時代：近世～現代

調査期間：平成22（2010）年8月3日～平成23（2011）年2月28日

調査内容：首里城公園整備に伴う遺構確認調査を約400m²実施

1.はじめに

平成22（2010）年度の中城御殿跡発掘調査は、遺構の残存状況や範囲を確認する目的で、御内原周辺において四本のトレンチを設けて実施した。ここでは調査区の歴史的変遷に加え、現時点で判明している主な調査成果について報告する。



中城御殿跡関連年表

西暦	元号	事項
1621~40	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1870年	尚泰23/明治3年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1875年	尚泰28/明治8年	世子・中城王子が新築された屋敷に移る
1879年	尚泰32/明治12年	廃藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る
1884年	明治17年	中城御殿ほか21ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定される
1945年	昭和20年	3月下旬 宝物を3つの大金庫へ移す
		4月6日頃 中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上
		4月8日頃 火災をのがれた御後絵(肖像画)を御嶽岩の後ろに移す
		4月10日頃 日本軍が殿を機関銃陣地にする(上之御殿、防空壕など)
		戦後 一時引き揚げ者のバーラックが建つ
1950年	昭和25年	1月 首里市役所が中城御殿跡に移転する 7月 首里市営バスが営業所を同敷地内に設置する(~66年まで)
1954年	昭和29年	首里市が那覇市に合併され首里市役所が首里支所となる
1965年	昭和40年	琉球政府が敷地譲入
1966年	昭和41年	首里支所が当蔵に移転 首里バス(1951年に民営化)が当蔵へ移転
		10月 米国援助により新敷地に鉄筋コンクリート建の新館を建設 龍潭池畔にあった「琉球政府立博物館」が移転 11月に開館
1972年	昭和47年	5月 日本復帰にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1991年	平成3年	県立博物館による石牆部分の第1次発掘調査実施
1992年	平成4年	県立博物館による石牆部分の第2次発掘調査実施
1994年	平成6年	県立博物館による石牆部分の第3次発掘調査実施
2006年	平成18年	3月 沖縄県立博物館が新館移転(おもろまち)のため休館
2007年	平成19年	県立埋蔵文化財センターによる遺構確認調査開始

2. 調査区の歴史的変遷

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅跡を指す。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切及び知行を与えられ、中城王子・中城御殿と呼ばれたことによる。当初その建物は、17世紀前半に現首里高等学校敷地内に創建され、王府の別邸である大美御殿の東面に位置したことから東宮とも呼ばれた。その後、中城御殿は1870（明治3）年に現在の首里大中町であるこの場所に移転し、1945年の沖縄戦により破壊されるまで存在した。今回調査の対象とするのは移転後の中城御殿を指す。

3. 調査の経過

調査区は当初、旧博物館解体後の造成土で覆われていたため、トレントの設定後、表土を重機掘削することから始まる。土色や遺構の有無を確認しつつ掘り下げ、遺構及び遺物包含層と思われる土層が現れた段階で重機掘削をやめ、人力による表土清掃に切り替える。その後、不発弾探査を目的とした磁気探査を実施したのちに作業員を投入して発掘を開始した。調査を進めるうちに、中城御殿とそれ以前のものと思われる石造の遺構や、造成の痕跡が確認された。また、調査中には現地説明会を開催し、377人の参加があり、地域住民の関心の高さを窺わせた。

これらの遺構は、実測・写真測量による図面作成を行うとともに、写真撮影による記録を取り、並行して土壤・炭化材分析のためのサンプリングを行い、3月末に遺構保護のために埋め戻して調査を終えた。トレントごとの遺構・遺物の状況は次のとおりである。

4. 調査の成果（遺構と遺物）

トレンチ 1

御寝廟殿や北之御殿と上之御殿の一角にあたる地点にあたる。検出された遺構は、御寝廟殿や北之御殿の地下に存在していた方形石組み遺構と(図版2)、御内原と上之御殿を仕切る石積みの跡で、遺物は表土や搅乱層から、沖縄産陶器や戦時中に岐阜県や佐賀県で焼かれた統制陶器・軍隊食器が多数得られている。

トレンチ 2

新御殿と大御庭、浮き道が存在した付近にあたる。遺構は新御殿のものと思われる石疊や側溝・暗渠跡、トイレ跡のほか(図版3)、大御庭の砂利敷きの面、防火用に設置された埋甕などが検出されている。遺物は肥前や瀬戸美濃産の色絵や染付が多数出土しているほか、青磁の便器と思われる衛生陶器も出土しており、中城王子の優雅な生活を偲ばせている。また、暗渠の中から戦時中に避難させたと思われる木製朱塗りの位牌が見つかっている(図版4・5)。

トレンチ 3

御内原と上之御殿を出入りする門と階段が検出されている(図版6)。門跡は礎石が4ヶ所にあることから、4本柱で扉は東側に開く構造であったことが想定できる。門をくぐると、踊場から右(北)へ階段を9段のぼる構造になっていた。この踊場の石疊と西側の壁面石積みには人為的に掘り込まれた痕跡があり、戦時に掘削されたことが考えられる。出土遺物は戦後の物がほとんどだが、その中に沖縄産のカラカラや小杯・小碗などが出土している。

トレンチ 4

中城御殿の台所である寄満が存在していた箇所から、上之御殿の拝所が存在していた付近までトレンチを設けた。遺構は建物周辺や床下に存在していた側溝や暗渠のほか(図版7)、御内原と上之御殿の境界となる石積みの根石や、拝所とされる大岩の付近からは、中城御殿以前の遺構と思われる石疊なども検出されている。出土遺物は沖縄産陶器が中心で新御殿付近の遺物と様相が異なる。

まとめ

今回は中城御殿の御内原と上之御殿地区の一角において4つのトレンチを設け、御内原では新御殿、御寝廟殿、寄満や、これらの建物に付随する遺構を確認した。また、この御内原と上之御殿の境界にあたる石積みや出入り口となる石門・石階段のほか、拝所として使用していた大岩の周辺からは、拝所の遺構の可能性がある石列や、その下部からは中城御殿以前のものと思われる石疊や石積みが検出されている。これにより、中城御殿の遺構は戦前・戦後に大きく改変を受けたことにより一部で破壊されているものの、良好な状態で残されていることがわかった。この詳細な成果は、今後、調査報告書としてまとめ、刊行する予定である。



図版1 トレンチ 1・3・4 遠景（東から）



図版2 トレンチ 1 石組み 1・2 検出状況



図版3 レンチ2 遺構検出状況



図版4 暗渠内から出土した位牌



図版5 赤外線照射により確認できた文字



図版 6 トレンチ 3 階段跡検出状況



図版 7 トレンチ 4 溝 1・溝 2 検出状況

喜田盛遺跡発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター

調査班 主任 濑戸哲也

場所：石垣市字新川小字喜田盛

目的：県道真栄里新川線街路改良工事に伴う発掘調査

期間：平成 22（2010）年 7月 7日～平成 22（2010）年 8月 6日

面積：50 m² 時代：中森期（15～17世紀）～近代 性格：集落跡

1.はじめに

調査地は現在の市街地にあたり、道路工事（県道真栄里新川線街路改良工事）に伴って、その影響を受ける範囲について調査を行いました（第1図）。この遺跡では、平成 12・13 年度にも石垣市教育委員会による発掘調査が行われており、中森期から近代にかけての集落跡であったことが分かっております。

今回の調査でも、ほぼ同様の調査成果が得られており、より具体的な遺跡の内容が分かりつつあります。時代ごとに、その内容を説明していきたいと思います。

2. 中森期（15～17世紀）

今回の調査では、中森期（主に 15～17 世紀）の建物跡と考えられる柱穴と土坑墓 3 基を確認することが出来ました（第2図）。柱穴は、具体的な建物のプランとしては抑えることが出来ませんでしたが、深さ 30cm 以上のものが多くあり、柱を据えたものと思われます。遺物は、大半が地元で作った土器ですが、中国産やタイ産陶磁器も出土しました（第3図）。

土坑墓は、地面を掘って穴を設けて、木棺などを使わないのでそのまま埋葬し、土を被せて埋葬したようです（第4図）。

土坑墓 1 では、若年（10 代後半～20 代前半）の女性が足を大きく折り曲げた形、いわゆる屈葬という姿勢で埋葬されていました。この骨はほぼ全身そろっていますが、膝蓋骨のみが見つかっておらず、足を折り曲げるとき膝を叩き潰した可能性が考えられます。

土坑墓 2 では、乳児が土坑墓 1 に比べると緩やかな屈葬で埋葬されていました。こちらは、体の側面に頭ぐらの石を数個置いていたようです。土坑墓 3 は、残念ながら一部骨を取り上げた後に墓であったことに気づいたため具体的な状況は分かることが出来ませんでしたが、骨からは幼児であるので、土坑墓 2 と同様な墓であった可能性が考えられます。

3. 近世

近世については、中国・沖縄・本土産陶磁器が 17～18 世紀のものを中心に見つかっておりましたが、19 世紀の遺物は少なく、また明確な遺構は確認できませんでした。その理由としては、この地域は明和（1771 年）の大津波で被害を受けた地域であり、その影響かもしれません。

4. 近代

近代には、今と同じような宅地であったようで、水溜やゴミ捨て場などの可能性がある土を貼った穴が見つかっています（第5図）。また、多くの陶磁器も出土しており、台湾産と考えられる陶器が注目されます（第6図）。

5.まとめ—喜田盛遺跡の特徴

このように、この遺跡は15～17世紀を中心とした集落跡で、建物跡に近接して墓も営まれることが特徴です。この15～17世紀の喜田盛遺跡のこれまでの調査成果を平面図（第7図）にまとめるに、建物跡と考えられる柱穴群と墓がセットになっているように見え、大きく4つのまとまりがあるように考えられます。このまとまりを屋敷地として考えると、石垣などの区画を持たない集落であったことが想定されます。

このような集落は、喜田盛遺跡が位置する現在の市街地周辺では幾つか見られており、この地域の特徴とも言えます（第8図）。一方、石垣島では14・15世紀を中心としたフルスト原遺跡など石垣をもった集落跡も見られ、これらとの関係を考える必要があります。

この喜田盛遺跡が営まれる15～17世紀には、石垣島では多くの遺跡が確認されております。特に、現在の市街地周辺に多くの遺跡が見られる理由としては、ここが海岸に非常に近いところで貝や魚が得やすかったことと、さらに井戸も多くあり水源が豊かな場所だったからと考えられます（第9図）。

つまり、現在も昔も人々が住みやすい環境というのは自然に大きく左右されるものと言えましょう。

沖縄県立埋蔵文化財センター 催しのご案内

企画展「沖縄いしの考古
10月 18日(火)～11月 20日(日)

第48回文化講座「縄文人の世界」

10月 22日(土) 14:00～16:

講師：小林 達雄（國學院大學名誉教授）

ギャラリートーク

11月 13日(日) 第1回 11:00～

第2回 14:00～

講師：大堀 皓平・金城 貴子

(沖縄県立埋蔵文化財センター専門員)

重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

「東南アジアと琉球」
2012年1月 28日(土)～2月 12日(日)

第49回文化講座

2012年1月 28日(土) 14:00～16:

「大交易時代を支えたタイ陶磁」

講師：向井 瓦（東南アジア考古学会）

「海を渡ったベトナム陶磁」

講師：矢島 律子（町田市立博物館）

※行事予定は変更する場合がありますので、開催前にHPなどで詳細情報をご確認ください



〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL (代表) 098-835-8751

FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>

開所時間：午前9時～午後5時（入所は午後4時30分まで）

休 所：毎週月曜日・年末年始（12月28日～1月4日）

国民の祝日（子供の日・文化の日を除く）

慰靈の日（6月23日）

※祝日と同曜日が重なった時は、翌日の火曜日も休所

その他臨時休所あり